

# 「忸怩」

—初稿—

2023/7/18

脚本 太郎

〈人物表〉

木原 (18) 高校三年生。

淀川 (18) 高校三年生。木原の彼女。

高城 (37) 木原と淀川がバイトする書店の店長。

ログライン

恋人と一緒にバイトができるのを楽しみにしていた木原が、新店長にパワハラされる恋人を見て見ぬふりしたのをきっかけに、後ろめたさと気まずさから恋人と距離を置き始める。

ねらい

徐々に関係が冷えていく男女の様子を描く。

1. 住宅街（夕）

下校中の木原（18）と淀川（18）。

二人は仲睦まじい雰囲気談笑している。

ふと、前から美人の、彼氏と手をつないだ女性が歩いてくる。

木原が女性に気付くと、少しの間見惚れる。

女性とすれ違った直後、淀川が肘で木原を軽く突く。

淀川 「美人だったね、今の人」

木原 「え？ い、いや……」

淀川が薄く微笑む。

淀川 「わたしと居ても退屈？」

木原 「まさか！ そんなわけないって！ ……えーと、何の話だったっけ？」

淀川 「もう。バイトの話でしょ？」

木原 「そうだったそうだった！ ……だからさ、もうお互い受験も済んでるんだし……淀川も、バイトくらいしてみても良いと思うなあ、って」

淀川 「そう思う？」

木原 「うん」

淀川 「木原くんと同じ本屋さんで……って話だったよね」

木原 「そうそう。店長もいい人だし、仕事もそこまでキツくないしや」

淀川、少しだけ思案する様子（形だけ）。

淀川 「……そっか。木原くんがそう言うなら、わたしもそこで働いてみようかな」

木原 「マジで！？ やった！ 絶対楽しいよ！」

嬉しそうに笑う淀川。

淀川 「うん。楽しみだね、一緒にバイトできるの」

2. 木原たちのバイト先の書店・外観（夕）

ガタガタと机が床に激しくぶつかる音。

3. 同書店・控室（夕）

高城（37）が、机を両手で思いっきり揺らしなが

ら癩癩を起して叫んでいる。机の上の物が落ちていく。高城は生え際が頭頂部付近まで後退していて、肥満体。

木原と淀川を含めた数人の店員たちがドン引きした様子で高城が暴れているのを見ている。

高城 「会計のときくらいイヤホン外せよクソ客があー！ なーんで俺が舌打ちされなきゃいけねーんだよガキのくせによお！ 俺はちゃんと仕事してるだろうがよお！ 俺の仕事は何の問題もねーだろうがよお！ 学生だか知らねーけど社会の歯車を敬えよこのハゲがあー！」

高城、『ハゲ』に合わせて一際大きく机を揺らし、同時に蹴る。

高城 「二度と来るんじゃないやねえ、このハゲ！ ハゲ！ ハゲエーッ！」

勢い余って机がひっくり返る。

高城、荒くなった息を整えると、店員たちを振り返る。

高城 「えー……失礼しました」

高城、神経質そうな目つきで店員たちを見渡す。

高城 「えー遅番の一部の人たちは初顔合わせになるかと思いますが、急遽この店舗を担当することになった高城です。

えー前の店長は盗撮で捕まりました」

木原と他数人の店員「えっ」

ざわめきが起こる。

高城が倒れたままの机を蹴る。

高城 「うるせーよ喋ってんだよ！」

ざわめきは止み、高城は一瞬満足げに微笑む。すぐ真顔になる。

高城、落ち着きなくウロウロ歩き回りながら話を再開する。

高城 「えーまあ盗撮云々を抜きにしても？ 本社から前の店長はかなりいい加減な人だったと伺ってます」

淀川が困惑した様子で、木原に何か問いたげな目を向ける。

木原も困惑した様子で首を振る。

高城 「えーしかしながら今日からはですね、心機一転、新体制で頑張ってもらいたいと思います。えーまずは皆さんにいくつか守ってもらいたいルールがあります。えー一つ、私の仕事のやり方には絶対口を出さな——」

高城、淀川の足に勝手に引っ掛かってかなり派手に転ぶ(勝手に)。

淀川も転びかけるが、木原が支える。

高城、四つん這いのような姿勢になって、怒りに身体を震わせている。

淀川 「あ、あの……すみませ——」

高城、勢い良く振り返りながら起き上がる。

高城 「てめー何しやがんだクソハゲがあ！」

淀川、恐怖ですくみ上る。

淀川 「ひ」

高城、淀川を値踏みするような目で睨みつける。

高城 「(淀川のネームプレートを読み上げる) 『淀川』……てめーか？ 新人の女じえーけーってのは？」

淀川 「あ、そうです……」

高城 「ハゲが……しつかりシゴいてやるから覚悟しろよ？ 俺あ甘くねーかな？」

#### 4.

#### 同書店・倉庫(夕)

木原がカッターナイフで段ボール箱を開けている。

周囲では数人の店員たちが作業をしている。

淀川が入ってきて木原に近付く。

淀川 「木原くん」

木原 「淀川……悪い。その、お前誘ったときは店長変わるって知らなくて……それもあんな……」

淀川 「うん、それは仕方ないけど……そうじゃなくてね、あの」  
高城が入ってくる。

高城 「てめ勝手にウロチョロしてんじゃねーよ！」

淀川 「……すみません」

高城 「おめ教えたこと全然できてねえじゃねーか！ ちっとこっち来いハゲ」

高城が淀川の手を引いて出ていく。  
淀川は木原に助けを乞うような視線を向ける。  
気まずそうに目を逸らす木原。

## 5. 同書店・店内（夕）

隅で高城が淀川を怒鳴りつけていて、客の一部から  
奇異の目を向けられている。

高城 「マジで何度言ったら分かんだよ馬鹿にも程があんだろ！」

淀川 「すみません……」

高城 「てめさては前世蠅とかかあ？ だとしたら納得だわ。虫  
けらの脳味噌じゃ人間様の言葉理解できませんよねえ？」

木原は気まずそうな面持ちで、二人の近くの書棚で  
品出しをしている。

ふと、淀川の方を見やる木原。

淀川は木原に、助けを乞うような目を向けている。

慌てて目を逸らす木原。

淀川の目に失望の色が混じる。握った拳が震えてい  
る。

## 6. 同書店・外観（夜）

バイト終わり。

数人の店員たちがパラパラと帰っている。

高城が淀川の耳元で、

高城 「お前次もこんな感じだったら許さねえからな」

と言つて駐車場に向かう。

すれ違いざまの店員 A が会釈しつつ、及び腰で高  
城に挨拶する。

店員 A 「……お疲れす」

高城 「疲れてねーよ。その変な挨拶やめろ」

店員 A 「（困惑気味に）ええ……」

高城が車に乗ると、木原が淀川に近付く。

木原 「淀川、その……大丈夫か？」

淀川、ムツとして、

淀川 「大丈夫だと思う？」

木原 「いや……」

淀川、小さく溜息を吐く。

淀川 「わたしちょっとコンビニ寄るから、木原くん先帰ってて」

## 7. 走行する高城の車の中（夜）

別々の方向に歩いていく木原と淀川がサイドウインドウから見える。

高城の口元が綻ぶのがルームミラーに映っている。

## 8. 学校・外観（朝）

### 9. 学校・教室（朝）

朝のホームルーム前でまだ先生は来ておらず、ガヤガヤしている。

淀川は窓際の席、木原はその斜め後ろの席。席が近いにもかかわらず、お互い一言も話さない。

淀川はずっと窓の外の景色を見ており、木原は淀川の方を時折伺っては、気まずそうに俯くのを繰り返している。

## 10. 木原たちのバイト先の書店・外観（夕）

### 11. 同書店・倉庫（夕）

高城がカッターで段ボールを切っている。

周囲に何人か作業をする店員がいる。

着信音が鳴り、スマホを取り出して画面を見る高城。

スマホの画面「エリアマネージャー 飯田」

慌てた様子で倉庫の出口に向かう高城。

## 12. 同書店・裏側の外観（夕）

小走りで移動してきた高城が外壁にもたれかかって通話に出る。

店員たちへのそれとは違い、ペコペコと過剰に卑屈な態度で応じる。

13. 同書店・控室(夕)

木原含め数人の店員が椅子に座っている。木原はペットボトルのお茶を飲んでいゝ。  
イラついた様子で入室してきた高城がゴミ箱を蹴飛ばし、ゴミが散らばる。店員一同、驚いてビクツとなる。木原のお茶が少量零れる。

高城、『管理室』と書かれた部屋に入り、ドアを力強く閉める。

すぐに高城が暴れる激しい音と共に彼の叫び声が管理室から聞こえてくる。

高城の声「ろくに現場のことも知らねーくせにゴチャゴチャうるせーんだよ！ エリアマネージャーだか何だが知らねーけどどうせ肩書だけで大した仕事もしてねーんだろうが！ 生意気言うんじゃねえよハゲでデブで豚のケツの穴みてーな顔面してるくせによおお！」

木原と店員の一人が立ち上がってゴミを片付け始める。

高城の声「つかスマホ越しでも口くせえってどんだけだよ？」

てめーのクソでも主食にしてんのか？ 顔面アナル野郎が」

『ハゲ』に合わせて一際大きな音が鳴る。

高城の声「スマホ臭くなるから二度とかけてくんじゃねえ、このハゲ！ ハゲ！ ハゲーっ！」

ドアが開く音がし、木原が音に釣られてそちらに目を向ける。

更衣室から出てくる淀川。一瞬目が合うも、すぐにお互い気まずそうに目を逸らす。

元いた椅子に座り直し、俯く木原。

淀川はそこは少し離れた椅子に座る。

14. 同書店・店内(夕)

暗い表情で品出しをする淀川。

突然高城から勢いよく肩を掴まれて何事かを怒鳴ら



れる。  
泣きそうな顔で謝る淀川。

## 15. 学校・校庭(夕)

校庭では運動部の生徒たちが部活に励んでいる。  
下校時刻なので大勢の生徒たちが校庭の隅を校門に  
向けて歩いている。

その他大勢と同じように歩く木原の横を、早歩きの  
淀川が無言で追い抜いていく。

淀川、数歩歩いた後に石につまづいてつんのめる。  
木原が咄嗟に駆けて淀川を支える。

木原 「だ、大丈夫か？」

淀川 「ありがとう。木原くんはやっぱり優しいね」

木原 「いや……」

淀川 「店長が見てないところでは」

木原 「え？」

淀川、木原を無視して再び歩き出す。

木原、遠ざかっていく淀川の背中を<sup>じくじ</sup>忸怩たる思いで  
見つめる。

つづく